

中村蘭林の文章学——十八世紀日本における朱子学の展開——

山本 嘉孝

はじめに

九代將軍徳川家重に奥儒者として仕えた中村蘭林（元禄十年（一六九七）～宝暦十一年（一七六一）、姓藤原、名明遠、通称玄春・深蔵）は、朱子学を信奉しつつも、師の室鳩巢とは異なり、朱熹の学説に疑義を呈した、というのが『先哲叢談』以来の定説である。^①その根拠とされるのは、徳盛誠氏の言を借りれば、蘭林の「古語考証に重きをおく古文辞学的な見方」^②である。この点については、井上哲次郎氏の「多少仁斎及び徂徠の説を参酌するものがあるが如し」^③、安西安周氏の「仁斎・東涯とは共鳴する点があつたが、徂

徠の説は何等参酌する所がなかつたやうである」^④、徳盛氏の「徂徠学を十分に吸収している」^⑤などの見解が示されており、仁斎学や徂徠学の摂取によるとの推定がなされてきた。事実、蘭林と面会し筆談を交わした朝鮮通信使たちは、「始知此人即伊藤惟貞之怪徒也」^⑥（始めて此の人即ち伊藤惟貞の怪徒なるを知るなり）、また「明遠則譏詆程朱。与維楨一套云」^⑦（明遠則ち程朱を譏詆す。維楨と一套なりと云ふ）と、蘭林を反朱子学的な仁斎学者として認識した。

その一方で、岩橋遵成氏の「中村蘭林は鳩巢以後よく我が国程朱学の系統を継承して所謂道統を維持した人である」^⑧、及び「朱子学の宣伝に力を尽した人は中村蘭林その人である」^⑨、日野龍夫氏の「厳正な朱子学者である蘭林」^⑩

との記述が示すように、蘭林の特徴を朱子学の信奉に見出す先行研究も存在し、また江口尚純氏の「蘭林は宋学を奉じながらも盲従するのではなく、平心に接していた」¹¹⁾との穏当な指摘も備わる。また上記研究では参照されないが、元文五年（一七四〇）から江戸で蘭林に師事した柳川藩の安東間菴は、「奉呈直学士中村蘭林先生」（直学士中村蘭林先生に呈し奉る）と題した七言律詩で、「程朱理学達淵源」（程朱理学淵源に達す）と、蘭林が朱子学の深奥に通じていたことを称揚している。¹³⁾ 蘭林自身も、漢文一篇「学説」（宝暦二年（一七五二）写、柳川古文書館蔵）の中で、「非程朱之教、不敢従」（程朱の教へに非ざれば、敢へて従はず）と、朱子学の遵奉を表明している。

蘭林は確かに朱熹に疑義を呈し、「古文辞学的な見方」を保持していたが、同時に朱子学も固く信奉していた。本稿では、この一見した矛盾について検討すべく、蘭林の文章学習、すなわち漢文の読み書きの学習に焦点を当て、蘭林における古文辞、すなわち漢代以前の文章表現への関心が形成された経緯、ならびに蘭林が文章学習を自身の学問のために如何に活用したか、の二点について考察する。なお本稿では散文をめぐる議論に焦点を絞り、蘭林の詩歌論については別稿に委ねる。

一、朱熹の読書法の遵守

『先哲叢談』巻七に拠れば、延享五年（一七四八）五月に朝鮮通信使と筆談した蘭林は、朱熹の経書解釈について「或言違古訓、義失古意者、未必為無」（或いは言古訓に違ひ、義古意を失する者、未だ必ずしも無しと為さず）と指摘し、また「但宋儒每每以近言解古言、以今意解古意」（但だ宋儒毎近言を以て古言を解し、今意を以て古意を解す）と、古学的な見解を示したとされる。¹⁴⁾ 一見、蘭林が仁斎または徂徠の学問に傾倒していたかのようなのであるが、実際のところはどうか。筆談の前年、奥儒者に任ぜられたばかりの蘭林が上梓した和文随筆『講習余筆』（延享四年（一七四七）刊）を参照しながら検証しよう。

『講習余筆』巻一は、四書五経の読書方法を中心に論ずる内容を持ち、朱熹『周易本義』について「朱子コレヲ強テトキ附会セルニ似タルコトモナキニ非レバ」、また朱熹門人蔡沈の『書経集註』について「穿鑿附会ナキニ非ズ」及び「皆コレヲ説得ントスルハ、却テ穿鑿ニ出テ古書ヲ読ノ心得ニアラズ」、そして朱熹『四書集註』については「或古言ニ違テ古意ヲ失フヤ、或其大義ノ上ニ就テ其主意ヲ謬レルコト、全クコレナキニ非ズ」と述べられている。

朱子学における經書注解の不備を指摘する点では『先哲叢談』所載の論と類似するが、「古言」「古意」が問題とされるのは『四書集註』に関してのみであり、『周易本義』『書經集註』については専ら「穿鑿」「附会」が問題視されている。なお蘭林はこれらの指摘について、具体例は一つも挙げておらず、一般論を述べるにとどまっている。

「穿鑿」「附会」とは、強引な解釈・こじつけを意味する語で、ともに『朱子語類』に散見される。同書(寛文八年(一六六八)跋刊)卷七十八・尚書一「綱領」には、『書經』読解に関する朱熹の発言として「却必要句句義理相通、必至穿鑿」(却つて必ず句句の義理相ひ通せんことを要せば、必ず穿鑿に至らん)と記されており、蘭林も『講習余筆』巻一で「朱子云ルハ、尚書ハ殘闕ノ余リニ收ムレバ、必句句ノ義理相通セントナサバ必穿鑿ニ至ラン」と、同一箇所を引用している。読解における「穿鑿」「附会」の回避は、『朱子語類』同条に「程先生謂読書之法、當平其心、易其氣、闕其疑、是也」(程先生、読書の法、当に其の心を平らかにし、其の氣を易らかにし、其の疑ひを闕くべしと謂ふ、是なり)とある通り、程頤の読書法に発する。『講習余筆』巻二に「大抵虚心平氣ニコレヲ讀マザル故ニ、精玩スルニ不及シテ異說ヲ成シ議論ヲ生ズ。学者ノ大病ナリ」とある通り、蘭林も同じ読書法を推奨している。よって蘭林の『周易本義』『書

經集註』批判は、朱子学における「虚心平氣」の読書法を否定するものではない。寧ろその不徹底を指摘する点で、朱子学に立脚しているのである。後世の学者が朱熹・蔡沈を組上に載せることは不遜ではあるが、「穿鑿附会」の存在を指摘せずに見逃すことこそ、朱熹の教えに背くことになる。蘭林が蔡沈を「スデニ朱子ノ教ヲ受ナガラ」と難詰するのもこのためである。

では『四書集註』と「古言」「古意」をめぐる蘭林の疑義は如何にして生じたのか。『講習余筆』巻一に「又多ク漢以上ノ古書ヲ讀マバ、自然ト朱子ノ功モ又疑フベキ処モ知得ベキナリ」とあるように、蘭林が漢代以前の「古書」に親しんだことによつてである。一見、蘭林の記述は『徂徠先生答問書』(享保十二年(一七二七)刊)の「宋儒の注解は失古言候。古言は其時代の書籍にて推候得ば知れ申候。後世の注解は違多候」などという徂徠の見解に似る。しかし、古書の読書を通して、「疑フベキ処」のみならず「朱子ノ功」も明らかにすることができると説いた蘭林は、長短含めた朱子学の正確な把握を目指していた。朱熹の長所よりも短所の検討に大きく傾く仁斎や徂徠の学問に依拠すれば、その目的は果たせない。そもそも蘭林は朱熹の「古言」「古意」からの乖離を「千慮ノ一失、賢者モコレヲ免レザレバ」(『講習余筆』巻一)と、極めて例外的事例として

捉えており、仁斎・徂徠のように朱熹が「古」を根本から誤解したとは考えていない。実際、『講習余筆』巻一では佐藤直方の『四書便講』（元禄五年（一六九二）跋刊）が朱熹の定説を知る上で有益な書として推薦されるのみで、例えば仁斎・徂徠の『論語古義』（正徳二年（一七二二）刊）や『論語徴』（元文二年（一七三七）刊）などの「異説」の書物は、推奨されていない。

二、室鳩巢の文章学の継承——古文辞の重視

では、蘭林は何を契機として、漢代以前の古書の読書を重視するようになったのか。仁斎・徂徠学に触発された可能性もある。しかし、蘭林に最も強い影響を与えたのは、師で朱子学者の室鳩巢であったと考えるのが自然である。事実、古書の読書と古文辞の習得は、仁斎・徂徠門の独占物であったのではなく、鳩巢によっても奨励されていたのである。

鳩巢は『駁台雑話』（寛延三年（一七五〇）刊）巻五「作文は読書にあり」条で、「古文辞に覃^{ふかう}思^{おもひ}せよ」と説いた。鳩巢の没後に刊行された同書には、鳩巢門を代表して蘭林が序文（寛延三年撰）を寄せており、そこには「明遠雖不敏、執經下座、窃与有聞焉」（明遠敏ならずと雖も、経を下座に執り、

窃かに聞く有るに与る）と、『駁台雑話』に記録される鳩巢と後学たちの問答の場に、蘭林も同席していたことが記されている。この一文は、朱熹が「大学章句序」で「雖以熹之不敏、亦幸私淑、而与有聞焉」（熹の敏ならざるを以てすと雖も、亦た幸ひに私淑して、聞く有るに与る）と程顥・程頤を慕う箇所表現を踏まえており、蘭林が鳩巢を厚く敬慕していた様子が窺える。

鳩巢は『駁台雑話』同条で、「翁数年文章に心を用て、何とぞ捷徑もあらんかという／＼尋求しが、後に文を学ぶに別に悟入の法なし。たゞ読書にあり」と、散文を学ぶためには読書が最適な方法であると述べ、「古今文章の大家」が作文練習よりも読書に励むことによって文章力を獲得したことの根拠として、韓愈「答李翊書」、柳宗元「答韋中立」、蘇洵「上歐陽内翰書」を挙げる。これら三篇の尺牘は、『朱子語類』巻百二十一・朱子十八で、朱熹が「読書用功之法」の模範として参照しているために、鳩巢も参考にしたのであろう。尺牘の内容を確認すると、韓愈は「始者非三代兩漢之書不敢觀」（始めは三代兩漢の書に非ざれば敢へて觀ず）と、当初は漢代以前の書物のみに限定して読んだことを記し、柳宗元は五經に加え、『春秋穀梁伝』『孟子』『荀子』『老子』『莊子』『国語』『楚辭』『史記』など、やはり漢代以前の古書を読書の対象としていたこと、蘇洵は韓

愈の文の他、『論語』と『孟子』を熟読したことを記している。『駿台雑話』同条で、「韓柳欧蘇が文章におけるは天授の材といへど、それさへ読書より得ざるはなし」との記述に続けて「古文辞をよむにつとむべし」と述べられていることから、鳩巢のいう「古文辞」が、唐宋古文作者が熟読した漢代以前の散文を指していることが確認できる。

唐宋古文作者が古文辞を学ぶことは、当然のようではある。しかし徂徠門の服部南郭が『南郭先生灯下書』（享保十九年（一七三四）刊）で、「欧蘇の韓柳氏古文を唱候以来、後世及第の節、經義の程文を立候時、皆其格に書候事に成行、初学よりたゞ其格ばかりを習候事にて、古書をも不見、学も不博」と指摘したように、特に宋代以降の古文作者は、文法の習得に拘泥して、古書の読書を怠ることがあった。「章法、句法、抑揚、頓挫などやうの沙汰は、粗熟して後の事なるべし」と説く鳩巢は、南郭と同じく、唐宋古文を規範とすることの弱点を古書・古文辞の輕視に見出していたようである。『駿台雑話』巻五「寸鉄人をころす」条でも、鳩巢は散文の学習方法について、「とかく古人の用ひし例をひろく考え」、「古の成語を多く記して」などと述べている。鳩巢と徂徠・南郭の文章学は、古文辞学習の必要性を説く点で、実は通底していたのである。

しかし鳩巢は、明代中期の李攀龍・王世貞らの擬古文を

規範とすることに対しては、大いに批判的であった。『駿台雑話』巻五「作文は読書にあり」条には、明代擬古文について「辞なづみ意塞り、或は奇險を務、或は怪僻に涉り、自から古文辞と称して世に傲れども、大かた見るにたらぬ事にて候」、また「いづれか今人の好める弇州・滄溟が文のごとく詭異難渋なる事やある」とあり、「文に韓柳欧蘇あるは、詩に李杜王孟あるがとし」と、唐宋古文が絶対視されている。鳩巢は名指ししないが、自身と同世代の徂徠を意識して明代擬古文を批判したことは確実である。したがって鳩巢は徂徠による擬古文称揚の最も早い批判者の一人に数えられるが、争点は、古文辞学習の是非ではなく、その方法論、すなわち古文辞習得の規範を唐宋古文と明代擬古文のどちらに求めるべきか、にあった。

蘭林の著述を通覧すると、蘭林が継承したのは徂徠でなく鳩巢の文章学であったことが明らかとなる。蘭林の『講習余筆』巻三には、「唐ノ末ニ韓退之出テ大ニ力ヲ六経先秦ノ古書ニ用ヒ」、「宋ニ至テ穆修伯長、歐陽永叔ハ韓文ヲ学ビ、蘇老泉ハ戰國策ヲ学ビ、東坡ハ檀弓、莊子ヲ学ビ、曾子固ハ劉向ヲ学ビシナド云コト、皆古文辞ヲ学ブ者ナリ」と、唐宋古文作者が漢代以前の古書を熟読し、「古文辞」を学習したことについて記される。また「古人ノ意ヲ得テ古人ノ意ト見エズ、古人ノ語ヲトレドモ古人ノ辞ト

知レザル様ニ翻案脱体スルヲヨク古文辞ヲ学トモ云ベシ」ともあり、「古文辞」の学習に基づく「古人ノ意」と「古人ノ語」の習得が、唐宋古文に特徴的な「翻案脱体」を行う上で不可欠な前提条件であることが述べられている。鳩巢同様、唐宋古文の根底に、漢代以前の古書の読書と古文辞の習得が見出されるべきことを強調しているのである。

蘭林は漢文随筆『学山録』（寛延四年（一七五二）刊）巻五でも、黄庭堅「答洪駒父書」から「老杜作詩、退之作文、無一字無来処。蓋後人読書少。故謂韓杜自作此語耳」（老杜詩を作り、退之文を作る、一字も来処無き無し。蓋し後人書を読むこと少なし。故に韓杜自ら此の語を作ると謂ふのみ）との箇所を引用し、韓愈の文が尽く漢代以前の文を踏まえて作られていることを強調している。

また明代擬古文についても、蘭林は鳩巢と同一の見解を示す。『講習余筆』巻三で「明ノ万曆ノ間、李于鱗、王世貞出テ一種ノ古文辞ト云モノヲ唱テ、ソノ声名籍甚ナリ」、「其辞ヲ離レテコレヲ看レバ、深キ意味アルニハアラデ実ハ浅近ナルコトノミ」、「估偲艱澁ニシテ読ニカタク解スルニカタフシテ」などと、明代擬古文の内容の乏しさと読みにくさを非難し、『学山録』巻五の「敖林二氏論文」条でも、明代の敖英と林希恩による擬古文批判を引用した後、「但今之称文人者、研理不精、読書不博、而唯知有李王耳」

（但だ今の文人と称する者は、理を研ぐこと精しからず、書を読むこと博からずして、唯だ李王有るを知るのみ）と、明代擬古文に学ぶ者が、「理」の究明を行わないだけでなく、李王の文しか読まず、古書そのものを読んではないことを批判している。蘭林も鳩巢と同じく徂徠の名を出さないが、これも明らかに徂徠門の学問・文芸に対する批判である。

『講習余筆』巻三には「凡文辞ヲ学ントナラバ、漢以上ノ古書ヨリ其材ヲトリ、其法ヲ韓柳欧蘇ヨリ得ベシ。サテ文選ヲ読テ其辞藻ヲトルベシ」、すなわち漢代以前の「古書」及び『文選』に見える言葉や事柄を学び、唐宋古文から散文の法則を学ぶべしとあり、蘭林が鳩巢から継承した文章学を端的に言い表している。また『学山録』巻五では錢謙益『列朝詩集』が引用され、明代中期の徐渭と袁宏道の文に低い評価が与えられており、清代の散文も、徐・袁の流れを汲むために「俚鄙浅近」であると非難される。古書・古文辞を軽視した徐渭・袁宏道を蘭林が高く評価しなかったのは、必然であった。

三、古文辞学習の汎用性

蘭林は『講習余筆』巻三で具体的な散文指導書や文集を推薦し、鳩巢が示した文章学習法の骨組みに肉付けを行

っている。推薦される散文指導書は、蘭林が挙げる順に、(宋)陳騭『文則』、(元)陳繹曾『文章政治』、(宋)王忠麟『辞学指南』(『玉海』所収)、(明)呉訥『文章弁体』、(明)徐師曾『文体明辨』、伊藤東涯『作文真訣』(元禄十一年(一六九八)序)の六点で、その内三点は、仁斎・徂徠門が刊行に関与したものである。『文則』の和刻本(享保十三年(一七二八)刊)は、仁斎・東涯・徂徠に学んだ山井崑崙による訓点、並びに徂徠の後序を備え、『文章政治』の和刻本(元禄元年(一六八八)刊)は、東涯が朝鮮の写本を校訂したもので、東涯の訓点・後序を備える。また東涯が著した『作文真訣』は、仁斎門の林義端『文林良材』(元禄十四年(一七〇一)刊)首巻、及び東涯『刊謬正俗』(寛延元年(一七四八)刊)附録巻に収められている。

しかし、古義堂・護園の散文指導書の推薦は、必ずしも仁斎・徂徠学の摂取を意味しない。¹⁷近世中期日本において漢詩文の指導書を精力的に刊行していたのは仁斎・徂徠の両門であり、程朱の玩物喪志説を守り、文章学習を末端視する姿勢を少なくとも表向きには保持していた朱子学者たちではなかった。但し、そのような朱子学者の中でも鳩巢は、『後編鳩巢先生文集』(宝暦十三年(一七六三)刊)巻十三所収の「中村氏五経筆記序」(中村氏は中村惕斎のこと)に「夫文辞得道之筌蹄也」(夫れ文辞は道を得るの筌蹄なり)と記

したように、「文辞」の習得を朱子学体得のための手段として殊に重視しており、また前節で検証した通り、鳩巢にとって「文辞」の習得とは専ら漢代以前の古書・古文辞を学習することであった。鳩巢の学問を継承した蘭林が、古義堂・護園の散文指導書を参照したことは、近世中期日本において、漢代以前の古書・古文辞の学習が、学統・学派を超越した汎用性を保持していたことの表れであったと考えるのが妥当であろう。

『文則』と『文章政治』の二書では、論孟五経など古書の文法が解説され、例えば『文則』巻上・乙第一条では「礼記」、「春秋左氏伝」、「論語」、「孟子」本文の助辞用法が例示される。徂徠は同書に寄せた後序(撰年不詳)で、「蓋欧蘇文名噪海内。古則蕩然。宋之弊也。陳騭生其間。心識其非、乃作為此書、根極經書。可謂何李之嚆矢矣」(蓋し欧蘇の文名海内に噪し。古則蕩然たり。宋の弊なり。陳騭其の間に生まる。心に其の非を識りて、乃ち此の書を作爲し、經書を根極とす。何李の嚆矢と謂ひつべし)と、『文則』の著者である陳騭を、明代の何景明・李夢陽に先駆けて宋代古文に反対した人物として位置づけている。しかしこれは徂徠の独断であり、同書は、鳩巢・蘭林のように朱子学を信奉し、且つ唐宋古文を模範とする古文辞学習を推奨する者にとっても有益な書物となり得た。

そもそも古書・古文辞の学習を根幹とした唐宋古文の学習は、鳩巢・蘭林のみならず、仁斎・東涯も推奨していたが、鳩巢・蘭林の文章学は、古義堂の文章学と大いに共通する。東涯は「文章政治後序」（元禄元年（一六八八）撰、「文章政治」所収）で「文章政治者、作文之規矩準繩也。凡学為文者、不可不本之於六經、而參之於此書」（文章政治は、作文の規矩準繩なり。凡そ文を為すことを学ぶ者は、之を六經に本づけて、之を此の書に參へずんばあるべからず）と、文章の根本は六經から学ぶべきことを指摘しており、古文辞の習得を基盤とした文章学を奨励している。東涯の『作文真訣』『讀書題目』に説かれる「雖諸子百家之語、而襲其語而翻其意、換骨奪胎、化腐為新」（諸子百家の語と雖も、而るに其の語を襲ひて其の意を翻し、骨を換へ胎を奪ひ、腐を化して新と為す）とは、蘭林のいう「翻案脱体」と一致する。また東涯と蘭林の文章学は、文体の区別を重視する点でも共通する。「文章政治後序」で東涯が言及する『文章弁体』『文体明弁』の二書は、唐宋古文の実例を挙げながら各々の文体について解説した指導書であり、蘭林は『講習余筆』で推薦する他、『学山録』巻五でも前者から大量に抄録している。蘭林が『講習余筆』で推薦する『辞学指南』も、文体ごとの文例と解説を載せた書物である。

さて蘭林が『講習余筆』巻三で推薦する別集三点は

（唐）韓愈、柳宗元、（明）方孝孺の文集、総集四点は（宋）真德秀『文章正宗』、（明）茅坤『唐宋八大家文抄』、（宋）謝枋得『文章軌範』、（明）鄒守益『続軌範』である。上記は全て唐宋古文、または唐宋古文を規範とした後世の文を載せるが、『大学衍義』の編者でもあった朱子学者、真德秀の『文章正宗』は、蘭林が「皆漢以上ノ文辞ナリ。コレヨリ下ハ唯韓柳・李習之ノミコレヲトル。古文辞ノ撰ニオイテ甚ダ正シキ者ナリ」と記すように、漢代以前の文を主として、唐代以降では韓愈、柳宗元、李翱の文に限定して収めており、その点で「古文辞」の習得を重視した総集である。東涯も、『作文真訣』総論で同書を推奨している。

他方、明初の朱子学者、方孝孺の文集をめぐる蘭林の記述は、蘭林の文章学が古義堂ではなく鳩巢の系統に属するものであることを示唆する。仁斎は『童子問』（宝永四年（一七〇七）刊）巻下・第四十章で「方正学、王遵巖、帰震川等、皆近世大家、正而有法」（方正学、王遵巖、帰震川等、皆近世の大家、正しくして法有り）と方孝孺に言及しているが、文章を高く評価するのみである。それに対し、蘭林は『講習余筆』巻三で「明ノ方孝孺ノ遜志齋文集ハ其議論正実ニ義理明白ニシテ、世務ヲ助ケ修省ノ益アリテ文辞モ亦ヨシコレ亦読ニヨロシ」と、方孝孺の「文辞」に加え、「義理」や「修省」などの朱子学の体得に関わる要素についても高

く評価している。鳩巢も同じく、『後編鳩巢先生文集』（宝暦十三年（一七六三）刊）卷六所収「答堀正修第二書」で、「若足下所称方孝孺之文、在明尤為傑然者。僕十七八時、従人借遜思齋集読之。皆韓蘇之文、程朱之学也」（足下称する所の方孝孺の文の若きは、明に在りて尤も傑然為る者なり。僕十七八の時、人に従ひて遜思齋集を借りて之を読む。皆韓蘇の文、程朱の学なり）と、方孝孺による唐宋古文と朱子学の両立を称賛しており、鳩巢と蘭林の見解は一致している。

また鳩巢は同じ尺牘で「僕謂今之学作文者、当以詩書六経為源、而觀於秦漢唐宋以尽其変、資於濂洛閩以正其趨」（僕謂へらく今の文を作るを学ぶ者は、当に詩書六経を以て源と為して、秦漢唐宋を觀て以て其の変を尽くし、濂洛閩に資して以て其の趨を正すべし）と述べ、文章の学習は、六経を根本とし、その上に秦漢の古書と唐宋古文を加え、終には周敦頤・程顥・程頤・張載・朱熹の学問、すなわち朱子学と合致させられるべきものであると説いている。方孝孺は正にこの方法で文章を学び、唐宋古文を介した古文辞学習と朱子学の体得を両立させた人物であった。『遜志齋集』卷十一「答俞子巖書」其二には、「苟能發明六経者、大之於天下国家、小之於善一己、直易易耳。況文詞乎」（苟しくも能く六経を發明すれば、大の天下国家に於ける、小の一己を善くするに於ける、直だ易易たるのみ。況んや文詞をや）とあり、六経の

学習が、修身・治国のみならず、「文詞」すなわち文章の学習にも有益であることが強調されている。また『明文衡』卷四十五所収の胡翰「劉養浩鏡歌鼓吹曲後跋」には、方孝孺について「先生博学、能古文辞」（先生博学、古文辞を能くす）と記されており、やはり方孝孺が「古文辞」の学習を重視したことが推察される。

蘭林は、仁斎・徂徠門の散文指導書とともに、真徳秀や方孝孺といった朱学者の著作をも推薦することで、近世中期に学統学派を超えて共有されていた古文辞学習の基盤の上に、朱子学に適う文章学を構築したといえる。蘭林は最晩年の和文随筆『寓意録』（宝暦十年（一七六〇）序、写、中野三敏氏御所蔵）卷下「道学者流」で、「我ゾ道学者ヨト得タリ顔ニ自任シ、世ノ学者ノ或ハ善ナル長ズル処ヲ容ズ、スベテ他ヲ視下、己ニ驕慢スルヨリ温厚仁恵ノ意アラデ、ソノ人品、謹篤ナル俗士ニ反テ劣ルコトアリ」と、他者の長所を認めない独りよがりな朱子学者のことを強く非難している。後述するように、蘭林は晩年に向かうほど深く朱子学を信奉するようになったため、これは朱子学批判ではなく、寧ろ私意に満ち心の平衡を失った朱子学者らしからぬ朱子学者に向けられた、いわば身内批判である。蘭林は学派が異なるとの理由だけで、有益な作文指導書を排除することはなかった。同時に、蘭林は相対主義に陥ることもせ

ず、朱子学を絶対的な価値基準とし、真徳秀や方孝孺の文集を勧めた。古文辞に対する関心は、朱子学者を含む近世中期日本の儒者たちに広く共有されており、それぞれの方法で自身の学問に役立てられていたのである。

四、文章学の応用——文献考証と仁斎・徂徠学批判

蘭林は多くの作文を残していない¹⁸⁾。実際、漢文随筆『閭窓雜錄』（宝暦七年（一七五七）序、写、国立国会図書館蔵）巻一「不漫作詩文」（漫りに詩文を作らず）条でも、「初学之士、好作詩文、則心馳于浮靡、与務実学玩義理者益不相入、而背於聖賢為己之訓矣」（初学の士、好んで詩文を作れば、則ち心浮靡に馳せ、実学に務め義理を玩ぶ者と益相ひ入れずして、聖賢己が為にするの訓に背く）と、初学者の詩文制作を戒めている。勿論、鳩巢が盛んに詩文を作ったことが示すように、朱子学においては詩文制作が禁止されていた訳ではない。しかし、文章を作るよりは読書に励み、道の体得に努める方がよい、との価値基準が置かれていたのも確かである。鳩巢も『駿台雜話』巻五「作文は読書にあり」条で、「著作を一向に廃せよとにもあらず。但十に七八の力を読にもちひ、二三の力を作るにもちゆべし」と述べている。そもそも鳩巢の文論も、作文論の形式を取りながら、これまで見てき

たように、その内容は、作文より読書に主眼を置き、特に漢代以前の古書の読書を奨励する、いわば読書論であった。蘭林の文章学の重心も作文ではなく読書に置かれており、蘭林は自らの文章学を専ら文献考証に応用した。蘭林の学問の特色は、字句・学説などの淵源・来歴を古書に遡って検討する点にある。蘭林の考証癖は生涯を通して貫かれており、その傾向は早くも明代の医学書を中心に抄録し様々な医学説を比較・考証した『証治指南』（享保十六年（一七三二）写、京都大学附属図書館蔵）に表れている。言葉の用法の考証については、特に鳩巢の友人であった水戸藩の安積澹泊の学問を参考にしていたようである。澹泊は漢文随筆『湖亭涉筆』（享保十二年（一七二七）刊）で古今の史書に見られる語の考証を行っており、鳩巢が序文（享保十二年撰）を寄せて、「考拠的確、辞理俱勝。有弃物之可称。無虚美之可譏。亦善志也」（考拠的確、辞理俱に勝れり。物を弁ずるの称すべき有り。虚美の譏るべき無し。亦た善き志なり）と、考証の精確さとその実用性を称賛している。蘭林も『講習余筆』巻二や『寓意録』で同書に言及しており、同書をよく参照していたことが知られる。

蘭林は度々、日本で広く使われる漢語を対象として、漢籍における初出用例の考証を行った。例えば『講習余筆』巻四では「上戸」「杜撰」「幽霊」「無恙」、また『学山録』

卷六では「先生」「京都」「珍重」「住人」「道具」などの語が取り上げられ、仏書を含む様々な漢籍が典拠として挙げられている。これらの語の考証は、余暇の楽しみに近いところもあったかと思われるが、蘭林は朱子学の用語や学説の淵源を探る、より本質的な考証も行った。『先哲叢談』の記述などでは、蘭林が朱子学に対して疑義を呈したことが殊に強調される向きがあるが、『講習余筆』では逆に、仁斎・徂徠学側からの朱子学批判に強く反論し、朱熹の学説を擁護する箇所が見られる。その顕著な例が「理」字の考証である。

蘭林は『講習余筆』巻四で、「或人ノ説二、(中略)理ノ字、以所存言死字也」(存する所を以て死を言ふ字なり)、また「聖人ハ道ノ字ヲ以言テ理ノ字ニ及ブモノマレナリ。莊子屢々理ノ字ヲ云リ」と、「理」の字が活きた人倫の道の形容としては不適切であり、古代の用例は『莊子』にしか見えない、との説を引く。「或人」とは伊藤仁斎のことであり、この箇所は仁斎の『語孟字義』(元禄八年(一六九五)刊)巻上「道」「理」にある議論の引用である。この仁斎説に對して、蘭林は「独り莊子ノミニアラズ。古書ニ道理トイヒ、天理トイヒ、只理ト云ルナド多クコレアリ。皆道ト云ベキ処ニ理ノ字ヲモ用ヒタリ」と反論し、漢代以前の古書すなわち『易経』『孟子』『荀子』『韓詩外伝』『礼記』『戦

国策』『吕氏春秋』『淮南子』『漢書』『論衡』、そして『文選』から「理」の字の用例を合計二十六件挙げ、朱熹を含む宋代の儒者たちが「理」の字を使用し始めたのではないことを証明する。同時に蘭林は「古ノ希ニ言コト、後ノ人屢言コトコレノミニ非ズ。其意ヲ得レバ何ゾ害アラン」とも記し、古代の文章に多くは見られない朱子学の用語・学説も、「意」を得ていれば問題ない、との見解を示す。朱子学における「理」と古書に見える「理」字の連続性が強調されることにより、古代の学問と朱子学との断絶を「文辞」の上で示そうとした仁斎への正面からの反論が展開されているのである。朝鮮通信使が仁斎の徒として認識したのとは異なる蘭林の姿が、ここからは看取できる。

「理」の他にも、蘭林は、朱子学で用いられる様々な語の早い用例を調査し、朱子学の正当性を主張した。『講習余筆』巻四では、「道体」と「天即理」の用例が、それぞれ『淮南子』本文と漢代高誘の『淮南子』注に見られることを指摘している。また『学山録』巻六でも、「道体」の用例が唐代の『周易正義』にも見えること、そして「乱道」の早い用例が『漢書』に見えることを指摘する。蘭林はこれら語の来歴を考証することによって、宋儒が使う用語に、「意」と「文辞」の両面において根拠が存在することを実証せんとした。これは蘭林が『講習余筆』巻二で、

「文辞上ノ正面ニナキ説モ生ジ、往往ニ穿鑿ニ失シ附会ニ出ルコトコレナキニ非ズ」と記するような宋学ないし朱子学の弱点を少しでも補正するための措置であったと考えられる。考証抜きに朱子学の用語・学説を受け入れることも理論上は可能ではあるが、蘭林にとって「文辞」を度外視した朱子学の擁護は説得力に欠けていたと想像される。但し、以上で検討してきたように、「文辞」重視の姿勢は、仁斎・徂徠の古義学・古文辞学に限定されていなかった。大庭卓也氏は、鳩巢の師、木下順庵の門下で、詩文が盛んに学習されていたことを、蘭林と同じく鳩巢門の河口静斎の語録から明らかにされた。¹⁹ 蘭林による考証は、仁斎・徂徠門とは系統を異にする、木門及び鳩巢門に独特な文学の発展型として位置づけられよう。

仁斎に加え、徂徠門から発せられた朱子学批判に対しても、蘭林は古書の考証に基づき反論した。『講習余筆』が刊行される前年、徂徠門の太宰春台は『詩伝膏肓』（延享三年（一七四六）刊）を刊行し、朱熹の『詩経』理解を批判した。蘭林は即座に同書を読んだとみえ、同年中に『弁詩伝膏肓』（延享三年跋、写、東洋大学附属図書館蔵）を著し、春台に反論した。春台は、勸善懲惡説を古代に存在せず、朱熹が初めて唱えた学説とし、古代における詩の用いられ方に即した断章取義によって『詩経』を解釈すべきことを説い

た。対して蘭林は、「徳夫以勸懲之説專帰之朱子者、是大不然」（徳夫、勸懲の説を以て専ら之を朱子に帰するは、是れ大いに然らず）と、「徳夫」すなわち春台の考証の誤りを指摘し、勸懲説を初めに唱えたのは朱熹ではなく、漢儒の王式であったとする。『漢書』儒林伝に「臣以詩三百五篇朝夕授王、至於忠臣孝子之篇、未嘗不為王反復誦之也」（臣、詩三百五篇を以て朝夕王に授け、忠臣孝子の篇に至り、未だ嘗て王の為に反復して之を誦せずんばあらざるなり）と、王式が皇帝の昌邑王（劉賀）の教化のために『詩経』を吟詠したことが記される箇所が蘭林の念頭にあったと思われる。更に蘭林は、『詩経』を勸善懲惡の枠組みで解釈する方法が早くも漢代から存在していたのであるから、「大抵徳夫以漢儒之学為有伝授者而信之、則王式之言勸懲、亦安知非其所伝也」（大抵徳夫、漢儒の学を以て伝授する者有りとして之を信ずれば、則ち王式の勸懲を言ふも、亦た安んぞ其の伝ふる所に非ざるを知らんや）と、古代の遺風を留める漢代を尊重する春台であれば、寧ろ勸善懲惡説を採用すべきではないか、と皮肉を記す。また春台が「詩無定義」（詩に定義無し）と記したことについては「不思徳夫為学之弊、一至於此也」（徳夫之学を為すの弊、一に此に至るを思はざるなり）と酷評している。

なお『弁詩伝膏肓』を下敷きとし、蘭林が翌年に刊行した『読詩要領』（延享四年（一七四七）刊）からは、春台に対す

る個人攻撃が全て削除されている。しかし、漢代の王式が勸善懲惡を説いた早い事例として言及されており、やはり朱子学が漢代以前の經学と決して隔絶するものでないことを証明せんとしている。

五、朱子学の体得

以上で検証した通り、蘭林は古書・古文辞の学習に立脚した文献考証を通して、朱子学が古代の聖人の道を正しく継承する学問であることを証明せんとした。但し、蘭林は学問の歴史を進歩史観によって把握しており、復古を目指していたのではなかった。

『講習余筆』卷二には「先聖ノ発セザルコトヲ後賢ノ発明スルコト、自然ノアリサマナリ」、また「其発明セルコトノトルベキト言フコトハ、大抵天文曆術ノ一事ニテモ察スベシ。〔中略〕明清ニ至テハ甚ダ精緻ヲ極メタリ」とあり、天文学を例に、時代が下るにつれて学説の精度は向上するものであるとの見解が示される。実際、蘭林は『学山録』卷一で清代の遊芸『天経或問』（和刻本は享保十五年（一七三〇）刊、西川正休点）などの天文学書や利瑪竇（マテオ・リッチ）に言及し、西洋天文学が近年にもたらした学術的進歩を肯定的に評価している。幕医の家に生まれ、五十一歳

で奥儒者に転ずるまで医者であった蘭林は、いわば自然科学者でもあった。蘭林が朱熹を評価したのは、朱熹が正に「先聖ノ発セザルコト」を「発明」し、古代の学問を大いに前進させたからであり、また蘭林が朱熹の經書読解の不完全さを指摘したのも、後世の者として、朱子学の精度を更に向上させ、学問の前進に資するためであった。

盲目的な朱子学受容を行わなかったところにも、蘭林の自然科学者の態度が反映されているといえる。但し、そもそも朱子学とは、安易に習得することのできないはずの学問であった。鳩巢も『駿台雑話』卷一に「年四十に近き頃にもあらん、ふかく程朱の学、終に易ふべからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潜め思を覃うする事今に三十年」と記すように、長い歳月をかけて読書を重ね、漸く朱子学を体得したという。朱熹自身も、蘭林が『講習余筆』卷一に「朱子一生ノ精力ヲ尽セルコト知ヌベキナリ」と記す通り、生涯を通して自らの学問の精錬に取り組み続けた。

『寓意録』自序では、蘭林の学問的遍歴が回想される。「二十余歳ニ及デ鳩巢室先生ノ門ニ遊、ソノ教誨ヲ受シヨリ、心ヲ經術ニ専ニセシナレドモ、イマダ深工夫ヲ用ズ、猶訓義ヲ事トシ、一二ノ異見モナキニシモ非ズ」と、享保年間（江戸で鳩巢に入門した頃）には「訓義」に傾倒したと

ある。「訓義」とは、文字の読み方と意味のことであるが、まず想起されるのは漢代の訓詁学である。事実、蘭林は『講習余筆』巻二で元代の朱子学者、劉因（静修）の「叙学」（稗編）巻七十七所収）から「必先伝注而後疏釈、而後議論勿好新奇勿好癖異」（必ず伝注を先にして疏釈を後にし、而る後に議論新奇を好むこと勿く癖異を好むこと勿し）との箇所を引用し、「劉正修ハ専ラ宋儒ヲ学ビ、朱子ヲ信ズル者ニテ其言如此ナレバ、其アラズシテ公正ナルコト観ツベク、其説誠ニ当レリ」と、固く朱子学を信奉していた劉因も、漢唐の訓詁学の有用性を説いたことを指摘する。全く同一の論は『学山録』巻四「伝註」でも展開されている。

よって若き蘭林は古註をも参考にしながら、語義の探究に傾倒していたと思われるが、その目的は、劉因と同じく、朱子学者に相応しい、「公正」で私意を交えない学問を行うことであつたであろう。「訓義」の語は『朱子語類』にも見える。同書の巻百四・朱子一「自論為学工夫」に、「韓退之所謂、沈潜乎訓義、反覆乎句説、須有沈潜反覆之功、方得所谓審問之」（韓退之が所謂「訓義に沈潜し、句説に反覆す」、須らく沈潜反覆の功有りて、方に所謂「審らかに之を問ふ」ことを得べし）とある。ここで朱熹は、韓愈「上兵部李侍郎書」から、韓愈自身がかつて古書の読書に励んだことを回想する「沈潜乎訓義、反覆乎句説」との箇所を引用し、

經書・史書を反覆して読書した後、漸く道の理解が得られることを説き、学問の階梯としての經史の読書を奨励している。したがって朱子学においても「訓義」の考究は要求されており、若き蘭林も朱子学のこの側面に特に関心を寄せていたと思われる。その上で「異見」が生じたところ、これは鳩巢が自身の若き頃を回想して『駿台雜話』巻一で「諸儒紛々の説に眩惑して」と記すのとは、やや趣を異にする。現存する蘭林の記述を通覧する限りは、蘭林による朱子学への疑義は、朱子学を修める過程において自力で着想したものであり、仁斎・徂徠学、または陽明学に依拠しなれば得られなかった、という類のものではなかったようである。

その後、「既二年所ヲ歴シ後、漸ニ大中正ノ道ハ孔孟ニ止リテ、孔孟未レ闡トコロノ義理ヲ發明シ其道ヲ推広ゲルハ程朱ニ勝ルナク、其學術ノ千古ニ卓越セルコトヲ知ヌ。コレヨリゾ専コレヲ信從シ、深ク義理ヲ研窮センコトヲ期シケル。但旧見ノ未免ニヤ、猶或ハ疑ヲ其間ニナサザルヲ得ザリ」と、年月を経て漸く道の理解が得られ始め、朱子学の信奉を心に誓ったが、それでも「旧見」と「疑」が残っていたとある。「旧見」「疑」の二語は『近思錄』（寛文八年（一六六八）刊）巻三・致知に「義理有疑、則濯去旧見、以来新意」（義理疑ひ有れば、則ち旧見を濯ひ去りて、以て新意を来

せ」とある箇所に見える。朱子学では、「義理」すなわち道の原理の把握に到達するまでには、幾度となく自力で疑念を乗り越え、新たな見地を開いていくことが要求される。したがって蘭林のいう「疑」とは、朱子学の体得を目指して前進する途上で直面した壁であり、仁斎・徂徠、あるいは貝原益軒などの場合のように、一旦朱子学を体得した後には生じた疑義とは区別されるべきである。蘭林の文献考証は、大小の「疑」と一つずつ向き合った形跡であるといえる。そして遂に、蘭林は六十歳前後になり、『寓意録』自序に「近キ比ニ至テハ、朱子ノ教、道体為学ノ両ナガラ備リ、其深切淳実ナル、亦余蘊ナキヲ識テ愈益コレヲ信ジ、猶是学ヲ励サンヲ欲ス」とあるように、朱子学を全身全霊で信奉し、周囲にも朱子学の習得を奨励するまでの境地に漸く到達することができたのである。

実際、宝暦年間の蘭林は『白鹿洞学規口解』（宝暦三年（一七五三）写、無窮会蔵）、『大学衍義考証』（宝暦六年（一七五六）写、国立公文書館蔵）を著し、『上蔡先生語録』（宝暦六年刊）を校訂するなど、朱子学の宣揚に力を注いでおり、『通書解翼義』（写年不詳、無窮会蔵）も蘭林の手による。また『寓意録』（宝暦十年序）巻下「今之儒流」で、蘭林は「士大夫ノ選挙ヲ皆學術中ノ人ヨリコレヲナシ」と、学力による人材登用を幕臣たちに課すべきであると述べ、「カ

クセンニハ、官ヨリ命ヲ下シ給テ、士大夫タル者ニ、皆ソノ子弟ニ學問ヲ励サシムルニアリ」と、將軍から命を下して徳川家臣の子弟たちに儒学を学ばせること提言している。異学の排除は特に呼びかけていないが、朱子学を修めさせる構想であったことは明らかであり、三十年後の寛政異学の禁を先取りする案といえる。蘭林は後藤芝山とは友人同士であり、芝山門人の柴野栗山も江戸遊学中に蘭林の教えを受けた²⁰。朱子学を基盤とした文教政策が広がりを見せ始める直前の享保・宝暦期において、蘭林のように、朱子学者の立場から、古書・古文辞の学習を基盤とした綿密な読書と考証を通して、朱子学の妥当性を真摯に検証した人物が存在していたことは、近世後期以降の日本における朱子学の拡大の要因を考慮する上でも看過されるべきでない。

おわりに

中村蘭林が朱熹の經書理解に疑義を呈したのは、第一には朱熹自身が提唱した「虚心平氣」の読書法を遵守した結果であり、第二には蘭林が「古書」（漢代以前に著された漢籍）と「古文辞」（「古書」に見える文章表現）によく親しんだことによる。蘭林が生きた近世中期において、古書・古文辞の学習は必ずしも仁斎・徂徠門のみの占有物ではなく、

蘭林が二十代で儒学を学び始めた当初から師事した朱子学者の室鳩巢も、朱熹が唐宋古文作者たちの古書学習を模範と見做したことを根拠に、古書の熟読と古文辞の習得を基盤とした文章学を提唱した。蘭林が鳩巢を欽慕し、仁斎・徂徠の学説、並びに明代擬古文を正面から批判していることを鑑みれば、蘭林に見られる古学的傾向は、鳩巢の文章学の継承と応用によると考えるのが自然である。蘭林は古書・古文辞の知識を活用して朱子学の用語・学説を考証し、「理」や勸善懲惡説などの重要な項目について仁斎・徂徠説を反駁することで、朱子学の正当性を確証せんとした。

少なくとも近世中期の半ば（十八世紀前半）までは、古書・古文辞の学習が儒学・漢学の基盤として学統・学派を越えた汎用性を保持しており、復古の学に立脚した朱子学批判だけではなく、朱子学者側から発せられた明代擬古文批判や仁斎・徂徠学批判にも利用されたことは、日本近世文学・思想史において、従来よりも注目されて然るべきであろう。少なくとも鳩巢と蘭林においては、古文辞の学習と朱子学は、必ずしも相反するものではなかった。これが木下順庵門下全般に共通する傾向であったかについては、別の機会に検討したい。

なお古書・古文辞の考証に基づく蘭林の学問は、清朝考証学とほぼ同時期、あるいはやや先行して展開された。直

接の影響関係はなかったとしても、安積澹泊や伊藤東涯ら
が取り組んだ考証の検討ともあわせて、今後、清代の学問
との比較が俟たれる。²¹⁾

注

(1) 原念斎『先哲叢談』（文化十三年（一八一六）刊）巻七に「蘭林雖奉宋学者、非如鳩巢之於宋説毫不可疑」（蘭林宋学を奉ずる者と雖も、鳩巢の宋説に於いて毫も疑ひを容れざるが如きに非ず）とある。

(2) 徳盛誠「筆談としての学問論、詩論——一七四八年の朝鮮通信使来訪——」（『前近代における東アジア三国の文化交流と表象——朝鮮通信使と燕行使を中心に——』国際研究集会報告書第二十九集、二〇一一年）、二二八頁。

(3) 井上哲次郎『日本朱子学派之哲学』（富山房、一九〇五年）、二二九頁。

(4) 安西安周『日本儒医研究』（龍吟社、一九四三年）、二四一頁。

(5) 徳盛誠、同上、同頁。

(6) 曹命采『奉使日本時間見録』乾巻（写、ソウル大学校蔵）。辛基秀編『大系朝鮮通信使』第六巻（明石書店、一九九四年）所収影印を参照。延享五年五月二十九日条には、蘭林を仁斎の徒と見做す根拠として、蘭林が『中庸』の作者は子思ではなかったと主張したことが挙げられているが、

現存する蘭林の著述に同様の論は見えない。

(7) 洪景海『随槎日録』（写、ソウル大学校蔵）。前掲『大系朝鮮通信使』同巻所収影印を参照。

(8) 岩橋遵成『大日本倫理思想発達史』上巻（目黒書店、一九一五年）、一八二頁。

(9) 岩橋遵成『近世日本儒学史』第一巻（東京宝文館、一九二七年）、五二頁。

(10) 日野龍夫「考証癖と文房趣味—文人的遊蕩—」（『江戸の儒学』日野龍夫著作集第一巻、ぺりかん社、二〇〇五年）、二九九頁。初出『国語国文』第四十二巻六号（一九七三年六月）。

(11) 江口尚純「中村蘭林『説詩要領』考略」（『中国古典研究』第五十四号、二〇一二年十二月）、一三頁。

(12) 黒沢恒直「柳河侍読安東間菴先生墓銘」。柳川市史編集委員会編『柳川の漢詩文集』柳川文化資料集成第五集（二〇〇九年）所収翻刻を参照。

(13) 安東間菴『間菴遺稿』（写年不詳、柳川古文書館蔵）。原書、及び前掲『柳川の漢詩文集』所収翻刻を参照。

(14) 前掲の曹命采と洪景海の記録には同様の論は見えない。蘭林自身による筆談録『韓客筆語』（写）は未見。

(15) 蘭林は『講習余筆』巻二で、藤原惺窩が『文選』を熟読していたことを肯定的に取り上げている。また蘭林の『群籍綜言』（宝暦九年（一七五九）写、国立国会図書館蔵）

巻五でも、唐代以降は『文選』が広く学ばれたことが指摘される。

(16) 伊藤東涯「文章政治後序」（元禄元年（一六八八）撰、『文章政治』所収）に「予嘗獲朝鮮写本」（予嘗て朝鮮の写本を獲たり）とある。

(17) 『国書総目録』は徂徠著『徂徠先生医言』（明和四年（二七六七）刊）の校閲者を蘭林としており、一見、蘭林が徂徠に私淑していたかのようなが、これは誤記であり、正しくは蘭林とは無関係の萩藩医中村玄春である。浅井九晶「萩生徂徠と萩藩医中村家について—『徂徠先生医言』をめぐって—」（『史泉』五十号、一九七五年）参照。

(18) 蘭林の詩文別集は未見。現存する著作の多くは随筆または経書解説書であり、文章として独立した漢文作品としては、管見の限り、自著所収の自序の他、室鳩巢『駿台雑話』に寄せた序文（寛延三年（一七五〇）撰）、同年に幕府奥儒者の徳力竜潤と共に撰した「南泉禪寺徳力有隣碑銘」（『日本教育史資料』七、巻十九「儒員小伝」、五八〇頁に翻刻所収）、友人の後藤芝山『元明史略』（宝暦元年（一七五二）刊）に寄せた跋文（宝暦元年撰）、「学説」（宝暦二年（一七五二）写、柳川古文書館蔵）が伝わる。また『徳川実紀』寛保元年（一七四一）九月七日、及び延享二年（一七四五）十一月二十七日の条に、まだ医者身分であった蘭林が儒臣に交じって詩文を献じたとあり、寛保元年に蘭林

が撰した賀文三篇が『三殿慶会集』（写年不詳、国立公文書館蔵）に収められている。

(19) 大庭卓也「江戸時代漢学者の『語録』とその周辺―河口静斎『秉筆録』―」（『久留米大学文学部紀要 国際文化学科編』第二十六号、二〇〇九年三月）。

(20) 前掲『元明史略』所収の蘭林跋文、及び柴野栗山「錦里文集序」（天明七年（一七八七）撰、木下順庵『錦里文集』寛政元年（一七八九）刊、卷一、柴野栗山『栗山文集』天保十三年（一八四二）刊、卷二所収）。

(21) 蘭林は『講習余筆』と『孟子考証』（延享五年（一七四八）刊）で、伊藤東涯の漢文随筆『弁疑録』（享保十九年（一七三四）刊）を引用しており、東涯の考証能力については高く評価していたようである。清代考証学を受容した大田錦城も、『九経談』（文化元年（一八〇四）刊）巻一で東涯による考証の精密さを称揚している。東涯は仁斎の学問とも異なる、一種の考証学を打ち出していたと考えられるが、東涯と蘭林の関係についての詳細な検討は、別稿に譲る。

付記 本稿をまとめるにあたっては、幕末明治研究会の諸先生方から貴重な御教示を賜りました。記して深謝申し上げます。

（東京大学大学院）